

海辺の生と死

島尾ミホ

海辺の 生と死

島尾ミホ



創樹社

海辺の生と死 0095—0038—4249

1974年7月25日第1刷発行

著 者 島尾ミホ

発 行 者 竹内 達

発 行 所 株式会社 創樹社

電話 東京 815・3331(代) 振替東京・154580

東京都文京区湯島2・2・1 〒113

本文印刷 萩原印刷

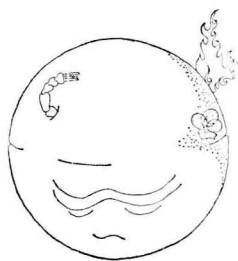
製 本 美成社

装 幀 早川良雄

1974 © Miho Shimao 乱丁・落丁本はお取り替えます。

序
文

島尾敏雄



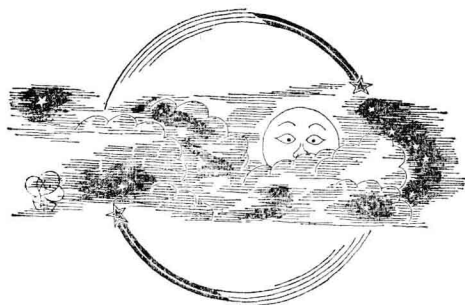
妻はこれまで私にその幼時の思い出をかたてきかせることを断念しようとはしなかったが、これから先も変わることはあるまい。その内容は従っておなじことをくりかえすことにもなるが、そのかたり口の中に、対象をどこまでも見つめて厭くことのないひたむきな目なざしが感じられて、私は思いあたることがすくなくなかった。

なかでも父母をかたるときその思慕のたかぶりに、はじめのころの私は戸惑ってばかり居た。今とてもなおその親子のかかわり方に充分には理解が届いていないかもしれない。ほんとうのところ私はそのような親子を今までに見聞きしたことはないのだから。妻は父からも母からも叱られた記憶がただの一度もないと言っている。私は妻の父をその晩年のほんの短いあいだけ垣間見たが、その乏しい体験から言くと、妻のこのことばはうべなうことが出来そうに思いながらも、やはり結局のところ私にはふしぎなとしか言いよう

創樹社の竹内、玉井の両氏から出版のはなしが起こされたとき、私は昨年同社から出してもらった「東北と奄美の昔ばなし」のことを考えていた。それは長男の伸三の挿画と共に妻の方言吹き込みのソノシートを加えることによって家族共同作業の書物となっていたから、今度もその踏襲となるかもしれないというようなことを。つまり私には躊躇の気分がたゆたっていたのだが、妻の大きな喜びのまえでは、それはたちまちにして飛び散ってしまったと言わなければなるまい。何よりも妻はこの書物が父母への思いと子らへのきもちをかたちにして現わすことができると思いい定めているのだ。それに今度も長男が挿画を描いて手伝ってくれた。

今私は自分の書物が出来上るよりもはれがましい喜びの中に居るが、それにつけてもこの書物の誕生に力を添えてくれた方々に深く感謝せずにはおられない。

目
次





序文——島尾敏雄

I

旅の人たち——沖繩芝居の役者衆 13

旅の人たち——支那手妻の曲芸者 26

旅の人たち——赤穂義士祭と旅の浪曲師 36

旅の人たち——親子連れの踊り子 65

II

真珠——父のために 85

アセと幼児たち——母のために 91

鳥九題 100



III

マシキヨ
猫とマシキヨ
アカヒゲ
ルリカケス
クツキヤール
ウイチウジ
フクロウ
マヤとフクロウ
鳥さし富秀

茜雲 118

洗骨 126

海辺の生と死 135

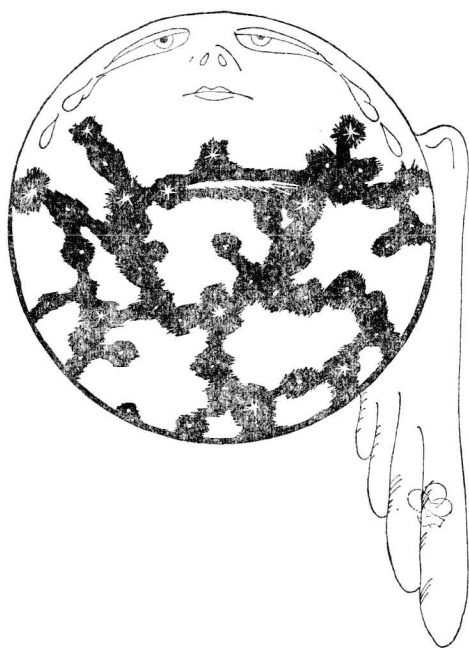
特攻隊長のころ 143

篋底の手紙 148

その夜 152

あとがき 183

海辺の生と死



島尾ミホ

装幀——早川良雄

本文挿絵——島尾伸三

●本扉のカット写真は、右が著者六歳の頃、
左が著者の戦時中のもの。

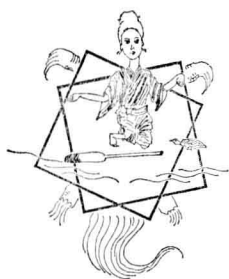
編集部

I



旅の人たち

沖縄芝居の役者衆



幼い頃に歌った島の歌を聞かせて欲しいと夫に言われて、思い出すままにそのいくつかを歌ってみましたところ、なかには沖縄民謡ではないかと指摘されたものもあって、今までずっとそんなことなど思ってもみずに、昔からふるさとの島で、親から子へと伝承されてきた童歌かなんぞのつもりで、折にふれてはおのずと口遊んでいたそれらの歌を、思わずふりかえってみる思いがしました。

その頃奄美大島の港には、間遠に日本本土から蒸気船がやって来て、そちらからの客や積荷をおろし、こちらからは黒砂糖の樽や大島紬などを積み込んで帰って行き

ましたが、その大島から海峡ひとつへだた私の故郷の加計呂麻島では、遠い処へ行くのにも丸木を刳り貫いた丸木舟か、板を接ぎ合わせて造った小さな板つけ舟しかなく、それを糧で前掻きに漕いで往き来をしていました。それなのにそんな不自由な海の旅を重ねながらも、いろいろな旅人たちが、この南の小さな島蔭の、入江奥の集落までも渡って来ては去って行くのでした。

蘇鉄の群生する岬にかこまれた入江の奥でよそ島とのかかわりあいも少なく、自分たちだけの間で親密なつながりを保ちあいながら、ひそやかに平和な年月を過ごしている島の人々の上に、旅の人たちはさまざまの思いや翳りを落として去って行きました。子供らは今まで聞いたこともなかった歌を覚えていつのまにか自分たちのものに、人妻は豚の脂身から取った髪油よりもずっと匂いのいい椿油を黒髪に撫でつけるようになり、美しい娘には、生涯ひとり身でふしあわせに暮さなければならぬような、悲しい出来事が残されることもありました。

その旅の人々は、沖繩芝居をする役者衆、支那手妻をしてみせる人たち、親子連れの踊り子、講釈師、浪花節語りなどの旅芸人や、立琴を巧みに弾いて歌い歩く樟脳売